

2022 年度 決算報告
説明要旨
2023 年 4 月 26 日

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/230426.pdf>

【説明内容】 (取締役常務執行役員 曾根 芳之)

p. 2 2022 年度 Q4 (第 4 四半期) 総括とセグメントの概況

総括：Q4 連結実績は対前年同期で増収減益、対前期で減収減益。原料価格は国産ナフサ下落、アジアブタジエン上昇、為替は円高に推移。経済不況により需要は低迷し、総じて市況は振るわない状況。

エラストマー素材の概況は、主原料価格に応じた販売価格の改定、為替の影響等により、YoY は増収減益、QoQ は減収減益。QoQ で出荷量は上向くも、市況は精彩を欠く状況。

高機能材料の概況は、電池材料の売上高は顧客在庫調整により減少するも、連結調整の影響で横ばい。YoY は大型フィルムの出荷減で減収、QoQ は高機能樹脂を中心に出荷量が増え売上高は増加するも、収益認識基準の調整で減収。エネルギー価格および新規開発費用の増加等により YoY・QoQ とともに減益。

p. 3 2022 年度 Q4 の事業環境 (為替・主原料推移)

為替は、米ドル・ユーロともに対前年同期で円安、対前期で円高に推移。

主原料価格は、金融不安による原油価格の下落とナフサクラッカー減産の影響で、国産ナフサ・アジアブタジエンは異なる動きを示し、第 4 四半期はナフサ 66,500 円、アジアブタジエン 1,089 ドルとなった。

p. 5 2022 年度 Q4 業績サマリー (全体)

四半期で、売上高は 944 億円、営業利益は▲7 億円となり、対前年同期で 14 億円の増収、87 億円の減益、対前期で 24 億円の減収、83 億円の減益となった。

なお、当期純利益が大きく減少しているのは、合成ゴム・ラテックスの収益性低下に伴い、徳山工場の生産設備等の減損損失 116 億円を計上したため。

通期で、売上高は 3,886 億円、営業利益は 272 億円となり、対前年同期で 269 億円の増収、173 億円の減益。年間売上高 3,886 億円は、当社過去最高の売上高となる。

p. 6 2022 年度 Q4 業績サマリー (セグメント別)

売上高は、エラストマー素材が 549 億円と対前年同期で 23 億円の増収、対前期で 10 億円の減収、高機能材料が 239 億円と、対前年同期で 26 億円の減収、対前期で 11 億円の減収となった。

営業利益は、エラストマー素材が▲20 億円、高機能材料が 18 億円と、両セグメントともに対前年同期、対前期ともに減益となった。

p. 7 2022 年度 業績サマリー (セグメント別)

対前年同期で、エラストマー素材は増収減益、高機能材料は減収減益。

売上高および営業利益は業績予想と大きな乖離はないが、徳山工場の製造設備等の減損損失が発生したため、当期純利益が大幅に変動した。これに伴い、4 月 19 日に 22 年度業績予想を修正させて頂いたので、最新の業績予想と実績に乖離はない。

p.9 エラストマー素材 概況

左グラフ：国産ナフサ価格の下落に応じ販売価格を調整したことで、売上高は減少。

右グラフ：合成ゴムの21年度第4四半期の出荷量を100とした場合の出荷量推移を指数で表しており、主力工場の定期修繕により、対前年同期で出荷量は減少したが、対前期では定期修繕を終え生産量が回復したため、増加した。

なお、徳山工場の一時停止期間は1月15日より約30日程度を予定していたが、2月1日より操業を再開している。

(ご協力を頂きました関係各署の皆様にご改めて御礼申し上げますと共に、ご心配をおかけした皆様へお詫び申し上げます。)

p.10 エラストマー素材 P/L

出荷量は21年度第4四半期の出荷量を100とした指数でお示ししている。

合成ゴムは9ページで説明済のため割愛。ラテックスは手袋向け流通在庫過剰の状態が続き、化成品はQoQで出荷が回復したものの、主用途の粘着テープ向け出荷は伸び悩む。

以上により、エラストマー素材事業全体で出荷量は対前年同期で減少したものの、対前期で増加した。また、売上高は、原料価格に応じた販売価格改定により対前年同期および対通期で増加したが、対前期では減少した。

p.11 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

対前期で出荷量は増加しているが、収益認識基準等の調整により10億円の悪化が入った結果、数量差は3億円の悪化となった。収益認識基準等の調整は、事業要因とは関係のない期ずれとご理解いただきたい。また、原料価格に連動した販売価格の下落により、価格差は37億円の悪化、円高の影響で為替差は9億円悪化した。原価差は徳山工場定修および一時停止の影響により5億円悪化し、販管費差は海上運賃鎮静化で5億円の良化となった。以上の合計で、営業利益は49億円の悪化となる。

p.12 エラストマー素材事業：要因別 営業利益差異 (YoY)

対前年同期では、出荷量減の影響により数量差は55億円悪化。価格差は、原料価格高騰を反映した販売価格改定により250億円の良化、また為替差も円安により112億円の良化。原料価格影響とエネルギー価格高騰を受けた原価差357億円の悪化と、海上運賃上昇等による販管費差35億円の悪化が発生。以上の合計で、営業利益は84億円の悪化となった。

p.14 高機能材料 P/L

高機能樹脂は、大型フィルムの需要が戻ってきているものの、本格的な回復には至らず、中小型フィルムが出荷の端境期に入った。また、光学樹脂で出荷量に応じ売上高は増加したものの、収益認識基準に基づき、売上計上のタイミングを翌期以降に繰り越す調整が多く発生した。その結果、対前年同期・対前期ともに売上高は減少。

高機能ケミカルの売上高は、テレワーク需要の一巡によるトナーの出荷量減で対前年同期は減少したが、電池材料が顧客の在庫調整で減少するも、連結調整（海外関係会社について好調であった10-12月が連結されたこと、また連結消去の調整額が減少したこと）で底上げされ、対前期は横ばいとなっている。

p.15 高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (QoQ)

対前期で数量差▲21億円のうち▲13億円は、光学樹脂の収益認識基準調整等がQ4に増えたことによる事業状況とは関係のない数字であり、差し引いた残り8億円は、電池材料および中小型フィルムの出荷量減によるもの。価格差は、光学樹脂と化学品の価格改定により6億円の良化、円高で為替差は4億円の悪化、原価差はトナーを中心に1億円の悪化となった。販管費差は、試作費等を含む新規開発費用の期末検

収集中等により 11 億円の悪化。以上により、営業利益は合計で 31 億円の悪化となった。

p. 16 **高機能材料事業：要因別 営業利益差異 (YoY)**

対前年同期では、光学フィルム・電池材料の出荷量減により数量差は 66 億円悪化したが、販売価格改定で 33 億円、為替差で 27 億円良化。原価差は棚卸資産関連費用 13 億円の悪化を含み、65 億円の悪化、販管費差は海上運賃上昇等により、9 億円悪化。以上により、営業利益は合計で 81 億円の悪化となった。

p. 17 **高機能ケミカル事業：電池材料の状況（出荷量）**

表は、電池材料の第 4 四半期の出荷量を対前年同期、対前期と比較したもの。

EV 向けの出荷量は、中国を中心に顧客の在庫調整が行われたため、当社の出荷も伸び悩んだ。その結果、対前年同期が 69%、対前期が 68%と減少したが、EV、電池市場成長に後押しされ、対前年通期は 110%と増加した。

民生他向けは、第 3 四半期に中国春節に備えた出荷前倒しがあり、第 4 四半期は反動減を受けた。また、モバイル端末を中心に市場は振るわず、対前年同期・対前期ともに出荷量減となった。

p. 18 **高機能樹脂事業：光学樹脂の状況（出荷量）**

光学用途向けは、経済不況によりモバイル端末向け等の需要は低調に推移し、対前年同期および対前期で出荷が伸び悩んだ。このため、より需要の堅調な医療その他向けへの展開を推し進めている。

医療その他向けについては、第 3 四半期の出荷端境期を経て第 4 四半期はまとめ出荷期となり、対前期 142%、対前年通期 122%と増加した。

p. 19 **高機能樹脂事業：光学フィルムの状況（出荷量）**

中小型向けは、出荷の端境期に入り、また経済不況によりモバイル端末市場が振るわず、対前年同期・対前期ともに出荷量減となった。

大型向けは第 2 四半期に発生したテレビメーカーの大規模な部材調達停止から、対前年同期 83%、対前期 160%まで回復。23 年度からの本格的な需要回復に備え、供給準備を進めている。

なお、当社から見た用途別の市況動向については、参考資料をご確認いただきたい。

p. 21 **B/S 概要**

総資産は高機能材料製品を中心に、定修を控え在庫の積み増しを行っているため、流動資産が 217 億円の増加、投資有価証券の時価評価益を中心に固定資産は 165 億円の増加となり、総資産は対前年同期で 382 億円増加し、5, 229 億円になった。こちらに、短期借入金 190 億円を含む流動負債の増加 219 億円を差し引きし、純資産は 175 億円の増加となった。

p. 22 **C/F 概要**

ポイントは棚卸資産の増加になるが、これは第一四半期半ばから始まる水島工場の定期修繕に備え、高機能材料製品を中心に在庫の積み増しを行っているため。

結果として、フリーCFは▲145 億円、トータルCFは▲174 億円となった。

p. 24 **2023 年度 事業環境 エラストマー素材**

エラストマー素材事業の 2023 年度事業環境について、上期は 2022 年度下期並み、2023 年度下期より需要が回復すると見込んでおり、対前年比で減収減益の予想。

全体として、需要は 2022 年度をトップラインと想定しており、特に化成品は需要回復に時間を要する見込み。

p. 25 2023 年度 事業環境 高機能材料

高機能材料は、全体として堅調な需要回復、販売拡大を見込んでいるが、水島工場定期修繕があるため、上期は出荷調整を予定。

光学フィルムは、2023 年 10 月より完工予定の大型フィルムライン増設により、減価償却費が増加し対前年度で減益となる見込みだが、中長期的には投資回収に問題はないものと考えている。

p. 26 2023 年度 業績予想

2023 年度業績予想は、売上高 3,990 億円、営業利益 240 円とさせて頂いた。

p. 27 2023 年度 配当金予想

配当金予想は、2010 年度から 14 期連続の増配となる中間 20 円、期末 20 円、年間 40 円 とさせて頂く。

2023 年度の事業環境は依然として不透明であり、2022 年度比で増収減益の予想だが、中長期の将来成長見込や財務状況を勘案し、また安定的・継続的な配当政策に則り、株主の皆様へ少しずつでも還元を増やしていきたいとの考えから、今期も増配予想とさせて頂いた。

以上